



①子ども食堂の様子。地域の繋がりの場に。②③ボランティアが配膳。学校給食を思い出す大人も。④マンカラで遊ぶ子どもたち。中学生が小学生と対決

笑顔と会話ある食卓を 子どもたちに届けたい。

居場所や、育児中のママや赤ちゃんの憩いの場など地域のリビングとして開放。その結果「いろいろな友だち、おじさん、おばさんと顔見知りになることで、地域の見守りの目も増え、緩やかなセーフティネットにもなると考えています」と話すのは同食堂の代表、町内在住の飯塚結花さん。



の食堂の狙いは、「6つのこしょく」対策と、地域のコミュニティ創造の場としての居場所づくり。いわゆる「子ども食堂」は相対的貧困家庭や、単身親家庭の子どもたちを対象にしているところが多いのですが、「三芳おななかま子ども食堂」では対象者を限定していません。



ただきます！と大きな声が響く部屋。無償または低費用で提供された食材をボランティアが心を込めて作った料理。それを口に運ぶと思わず笑顔を浮かべる子どもたち。藤久保にある「三芳おななかま子ども食堂」の一角です。

できることから、できる範囲で、子どもたちに手を差し伸べる 地域が繋がり、笑顔が生まれる、子ども食堂。

未来の子どもたち、そして地域のためにできることは何か——。その想いが集約された「三芳おななかま子ども食堂」。笑顔あふれる食堂に伺いました。



三芳おななかま食堂の皆さん。調理や配膳のお手伝いのみならず、食材提供をするサポーターも。地域が丸となり、子どもたちの未来を支えています。

の食事の機会を減らし、地域のもので季節に合わせて手作りで食事をつくり、一緒に食卓を囲み、食と楽しい思い出を重ねていきたいと願っています。体の栄養だけではなく、心の栄養になる食事を、大勢で囲める環境をめざしています」とその意義を語ります。

地域が繋がる場

「子ども食堂」という、食に困っている人が利用するイメージがありますが、三芳おななかま子ども食堂は「地域が繋がる場」。「ゆっくりと親子とのふれあいの時間を持つてほしい」から保護者が食事の用意や片付けをする負担を減らすことも一つの目的です。

が自分事として捉え、できることから、できる範囲で行動している。それはSDGsの普遍的なものとも一致します。様々な想いがギュッと詰まった食事を終え「美味しかったです。ごちそうさまでした！」と笑顔で言う、すぐに我が家のようにくつろぐ子どもたちをボランティアの皆さんが温かく見守っていました。



人と人がつながる場所へ

地域の大人と子どもが顔見知りになり、見守りの機会を増やしていくため、三芳町にも地域の見守りの目や困ったときは頼れる場として「こども食堂」が必要だと考えました。2017年に活動をはじめ、今ではたくさんのサポーターの支えもあり、延べ約5,000人が参加するまでになりました。これからも人と人がつながる場、活躍できる場として活動を続けていきたいです。

子どもたちの
笑顔を未来に!

三芳おななかま子ども食堂 代表
飯塚 結花さん (45)

